

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★

## チャンシルさんには福が多いね

2019年 / 韓国映画

配給：リアリーライクフィルムズ、キノ・シネマ / 96分

2021 (令和3) 年 1月 16日 鑑賞

シネ・リーブル梅田

### Data

監督・脚本：キム・チョヒ

出演：カン・マルグム / ユン・ヨジ

ヨン / キム・ヨンミン / ユ

ン・スンア / ペ・ユラム / チ

ョ・ファジョン / ソ・ソンウ

オン / カン・テウ / キル・ド

ヨン / イ・ドユン / ムン・ヒ

ヨイン / イ・ヒョア / ク・キ

ヨイク / アナスターシャ /

キム・ヨンピル

## 👁️👁️ みどころ

私の大好きな韓国の鬼オキム・ギドク監督の新型コロナウイルスによる突然の訃報は大ショックだが、その対極の作風を確立しているのは、『シネマ42』で一気に4本を収録したホン・サンス監督。本作は、長年そのプロデューサー(PD)を務めてきたキム・チョヒの長編監督デビュー作だ。

アラフォー女性(正確にはジャスト40歳)のチャンシルさんは自分自身の投影のようだが、新作映画の撮影中に監督が急死するという失意の中でも、若いイケメンとの淡い恋(?)やレスリー・チャン(の幽霊?)との語らい等、わかったような、わからないような日常は・・・?

女性監督には「歴史大作」や「黒社会モノ」ではなく、等身大の私小説ドラマがお似合い。『82年生まれ、キム・ジヨン』(19年)でデビューした女性監督、キム・ドヨンらと共に、韓国で次々と生まれる若手女性監督に注目!

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### ■韓国では次々と若手女性監督が長編デビュー作を! ■

2020年11月11日に、韓国の鬼オキム・ギドク監督がラトビアで突然死亡したが、その原因は新型コロナウイルス。彼は世界三大映画祭を制覇した巨匠だから、韓国では大ニュースになっているはず。そう思ったが、韓国の映画人の多くは沈黙しているらしい。それは一体なぜ?

私は『シネマ42』で、「ホン・サンス監督×女優キム・ミニに注目!」という見出しで4本の映画を掲載した(285頁)。その一本『それから』(17年)の「みどころ」で私は、「男女の恋愛劇を会話劇で描く作風は、いかにも韓国的なキム・ギドク監督やパク・チャヌク監督の作風と正反対!お洒落で風刺の効いたそれは、なるほど、こりゃ韓国のウディ・アレンだ。」と書いた。

本作は、そんなホン・サンス監督の下で長年プロデューサー（PD）を務めてきた女性キム・チョヒの監督長編デビュー作だ。韓国では、『ハチドリ』（19年）、『82年生まれ、キム・ジョン』（19年）（『シネマ47』226頁）のキム・ドヨン等、次々と若手女性監督の長編デビュー作が続いている。世界的な女性監督作品では、セリーヌ・シアマ監督の『燃ゆる女の肖像』（19年）が絶賛されていたが、日本でもっとも有名な女性監督・河瀬直美監督の『朝が来る』（20年）（『シネマ47』118頁）は、イマイチだった。さあ、本作は？

## ■□■どぎつさなし！アクの強さなし！アラフォー女性を淡々と■

□■

韓国映画は「歴史モノ」はもとより、「南北分断モノ」、「黒社会モノ」、「刑事モノ」等々でも、どぎつく、アクの強いものが多い。それは、1600万人の観客動員を突破、興行収入歴代NO.1映画となった『エクストリーム・ジョブ』（19年）（『シネマ46』239頁）や『悪人伝』（19年）（『シネマ47』229頁）等を観ても明らかだ。しかし、それは男性監督に限っての話・・・？本作を含めて、近時韓国でスマッシュヒットとしている女性監督作品を観ていると、そう思ってしまう。つまり、韓国でも、女性監督作品はどぎつさなし、アクの強さなしということだ。

また、『82年生まれ、キム・ジョン』を筆頭として、女性監督作品は自分の体験を素材にした私小説的作品が多いが、本作もまさにそう。つまり、本作のタイトルになっている、アラフォー女性、正確には御年40歳の女性・チャンシルさん（カン・マルグム）は、キム・チョヒ監督自身を投影させた女性なのだ。したがって、どぎつさなし！アクなし！の本作は、そんなアラフォー女子の生きざまを淡々と！

本作冒頭、PDのチャンシル、妹分の若手女優・ソフィー（ユン・スンア）ら映画の製作スタッフや俳優たちが、一気飲みで大騒ぎしているシークエンスが登場する。それをリードするのはチ監督（ソ・ソンウォン）だが、一気飲みを終えた彼が突然ぶっ倒れてしまったからビックリ！さらにその直後、有名なショパンの葬送行進曲が流れてくるからアレ・・・。キム・ギドク監督は突然亡くなったが、ホン・サンス監督はもちろん生存中。それなのに、キム・チョヒ監督デビュー作の冒頭を、そんなシークエンスにして大丈夫なの・・・？

## ■□■半分は自叙伝！？いやいや、映画はやっぱ作り物？■□■

映画作りにおける監督とPDの役割分担は作品によって千差万別。性行為に男性上位と女性上位があるように、監督上位もあればPD上位もある。冒頭の“一気飲みゲーム”を主導していたのがチ監督だったのと同じように、その映画づくりも監督上位だったから、チ監督が死んでしまうと企画自体が雲散霧消。主演女優のソフィーはまた次の映画で使ってもらえればいいが、同作の資金作りから雑用まですべて引き受けていたチャンシルは、その映画づくりがなくなれば、どうすればいいの？御年40歳のチャンシルがそんな風に

戸惑ったのは当然だが、日銭を稼ぐためとはいえ、まさか妹分の女優・ソフィーの家政婦になろうとは！

本作のヒロイン・チャンシルがキム・チョヒ監督自身を投影した女性であることは明らかだから、本作の半分は自叙伝！？そう思っていたが、まさか PD から家政婦への転身は自叙伝ではないはずだ。他方、ソフィーがどれくらいの人気女優かは知らないが、その代表作の紹介はないから、想像するに“大部屋女優”に毛の生えた程度？しかし、チャンシルに言わせると、ソフィーは寝る時以外はいつも走り回っているようで、歌やダンスのレッスンはもとより、フランス語の勉強まで自腹で家庭教師のキム・ヨン（ペ・ユラム）を雇ってやっているそうだからエライ。2人の客室（？）でのその授業風景はいかにも熱々だが、チャンシルの見立てではこの2人に恋愛感情はないようだ。ならば、この年まで映画づくり一筋で、恋愛にかまけたことのなかった自分でも・・・？そんなときめきを覚えたが、それって一体ナニ？

そんな風に真面目に本作を観ていると、ポクシルばあさん（ユン・ヨジュン）の家に間借りさせてもらっているチャンシルの隣には、下着姿の怪しげな男が登場！こりゃ一体ナニ？そんなストーリーを観ていると、本作は自叙伝ではなく、やっぱり作り物！？

## ■好きな映画は？レスリー・チャンの相手女優は？■

ホン・サンス監督の持ち味は、ウディ・アレン監督並みの軽妙さ、とりわけ会話劇のそれだから、長年その PD を務めたキム・チョヒの監督デビュー作がそれと同じような持ち味になるのは当然。フランス語の授業を終えたキム・ヨンが帰る時間と家政婦の仕事を終えたチャンシルが帰る時間は、よく重なるらしい。それがキム・チョヒ監督の演出のミソだ。すると、帰り道での2人の会話は？年齢的には若干チャンシルの方が上だから、この2人の話題はどこまで合うの？最初の帰り道での2人の会話は自己紹介程度だったが、チャンシルが申込み、キム・ヨンが快く受け入れた食事（デート？）の席での会話は？ここでは、ホン・サンス監督特有の軽妙な会話の面白さを彷彿させる会話を、キム・チョヒ監督が“映画ネタ”を中心に展開させるので、それに注目！もともと、そこで目立ったのは2人の好みの違いだったから、アレレ・・・。

他方、香港の名優・レスリー・チャンの代表作はチェン・カイコー監督の『さらば、わが愛／霸王別姫』（93年）（『シネマ5』107頁）だが、彼の“本籍”はウォン・カーウアイ監督の『欲望の翼』（90年）（『シネマ5』227頁）、『楽園の瑕』（94年）（『シネマ5』231頁）、さらに、あの当時には珍しかった男同士の同性愛を描いた『ブエノスアイレス』（97年）（『シネマ5』234頁）等の香港映画。『欲望の翼』や『楽園の瑕』で共演した香港の美人女優、マギー・チャンとの相性は抜群だった。しかし、2003年に死んでしまったレスリー・チャンが、なぜ本作に登場してくるの？それって、ひょっとして幽霊・・・？

## ■□■アラフォー女性いろいろ vs あの小説、あの映画■□■

昔は、女は結婚して子供を産むのが当然。そして、結婚し、子供を産んだ女は若い時は夫に尽くし、年老いた後は子に従うものだった。しかし、今はそんな常識は全く通用しないから、一概にアラフォー女性といっても既婚、未婚の別はもとより、子供の有無や仕事の有無等、アラフォー女性もいろいろだ。

他方、ジョージ・オーウェルの『1984年』は、ディストピア小説の代表として有名。この小説のおかげで1984年という年には特別な都市というイメージが定着している。しかして、1月17日付産経新聞は、中国の“80後（バーリンホウ）”と呼ばれる80年代生まれを代表する女性作家・郝景芳の新作小説『1984年に生まれて』を、立体的でみずみずしい“自伝体”小説として紹介した。同小説の主人公は、郝景芳と同じ1984年に生まれた軽雲だが、『82年生まれ、キム・ジョン』のヒロイン、キム・ジョンは1982年生まれだから、2年先輩。よく考えてみれば、本作のチャンシルも40歳だから、その生まれも1982年前後だ。しかし、『82年生まれ、キム・ジョン』のキム・ジョンは、結婚、出産、子育ての中で夫と幸せに暮らしていたが、本作のチャンシルはPDの仕事がなくなると、みじめさだけが目立つアラフォー女性だ。

恋の相手として胸の高まりを覚えていたキム・ヨンから「お姉さん」と呼ばれたのがショックなら、レスリー・チャンの幽霊に会い、会話を交わしていた自分もどこか変。妹分のソフィーは、たゆまぬ努力の甲斐あって次の出演映画に巡り合えそうだが、八方ふさがりの中、チャンシルはどうなるの？自分の道はどこにあるの？そんな本作の、分かったような、わからないような(?)結末は、あなた自身の目でしっかりと！

2021（令和3）年1月22日記